

刊例：三年九月二日第三種郵便物
平成二十一年十一月一日発行
通巻二〇一六年（毎月一冊）日発行

京鹿子

12月号

お火焚祭

丸山佳子

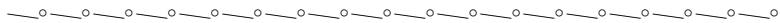
神様のみ言葉句碑に秋高し

理由なく好きにならせた藤袴

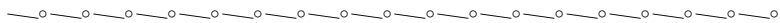
栗ひろふ育ちざかりの声三人

草折れば木の音発す二百二十^は日^か





秋惜しむ一期一会の釣橋で
人の鞆に不良を知らぬ赤とんぼ
洗ひ来し手をなほ浄めお火焚祭
長トネルに貫つて来たるくさめ三つ
白鷺百眼に入れ痛くない城下
あすまたと振り向きくれぬ竜田姫

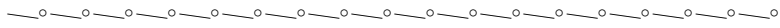


豊 田 都 峰

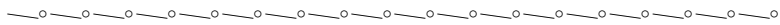
清響集 その九十二

ひとひらのこぼるるものに秋のこゑ
杜の奥木洩れ日として秋のこゑ
みほとけの反る指にある秋のこゑ
いわしぐもはみ出し千種南流す
栗届く父郷の山の日とともに
もれるなく群れ翔ぶ形は緋連雀





木のあひに雲の動かぬうそ寒さ
葉のひとつ立ちころびしてうそ寒き
総出してまづはのぼりを在祭
穂すすきに掃かれ遠嶺の水いろに
穂すすきにあそびつかれて白日に
すすき揺れひぐれをせかせるたりけり
露大地俳系ゆかりを彫みゆく
露満つる山河ひとひらづつの流雲



秀華採集

流灯の追伸として笹小舟

山中 志津子

靈を送る心一杯に乗せての「流灯」、それだけでも何か足りない思いにとらわれ追伸、という発想はよく、それが「笹小舟」とは感心した。

海鳴りも耳鳴りも去り九月来る

伊藤 希 眸

いわし雲大琵琶が出る川の幅

佐久間 多佳子

前句は雑音的な「耳鳴り」の並列がよく、後句は季語のあしらいで一層の広がりが出された。

近 詠

冬 近 し

鈴 鹿
仁

寒禽の夢見の枝をきららにす
冬鳥のそよろ歩きの浜あたり
八手咲く人に転機の重さあり
風音にあすへの序章冬近し

系露忌 三句

雲ひとつ風の速さに露零す
身に沁むや寡黙の鳥の一意めき
真葛原歩むあたりの黄葉あかり

近 詠

秋 の 花

宇都宮滴水

肩揉まれ馬鹿な話に暑をそらす
眠葉を怖さをたのむ晩夏光
急かされて阿呆も汗かく夏永し
闘病記綴つてみれば秋そこに
夏やせの笑顔をつくり人と会ふ
秋の花濃淡ゆめを同じくす
退院の声のやさしさ秋の花

神麓集



新関 一 杜

年暮れて身狭き路地の行きどまり
年の暮石を蹴りつつ坂下る
冬ざれの灯数へつつ歩む
一日の晴れ渡つての霜夜の灯
冬の波一枚一枚個性持ち

帰り花 林 日 圓

宗達の描きし屏風建仁寺
風神と雷神 凶屏風国宝に
屏風一隻光琳・抱一模写ひかる
連綿と琳派の画風歳惜しむ
滔々と琳派の流れ帰り花

八月 北村 香朗

今年また妻を迎える茄子の馬
終戦忌 卒寿と命 永らえし
平凡に 卒寿を迎う 終戦忌
歳と共に 頑固詮なし 百日紅
彼女の こと洩らせし 孫と盆休

藤 袴 藤岡 紫水

暮れいろにうねる一村芒原
今は亡き人と二人の梨をむく
蜉蝣の翳を失なふ水明り
群れ咲くも氣負ひは見せず藤袴
ふと思ふ我が生甲斐や虫の秋

島の秋 和田 照海

流灯の乱れ門波の過辺り
峰晴や海峡わたるルリシジミ
かなかなの鳴きそびれたる峡の葬
投げ渡すものにともづな島の秋
秋燕や楽譜はいまも読めぬまま

松田 都 青

芋嵐鬱と言ふ字をばらばらに
行く夏や女の意地の芯硬し
フアスナーが途中で止る長き夏
千の雲山の向うで待つ初秋
重力の軽くなりたる身が踊る

神麓集



蜘蛛逃ぐる角を折れても陽の範圍
彼岸花今年も母の忌を知らず
片膝を立つ虫の音も遠くなり
秋暑しもぐらたたきの如き治療
病室の下は灯の海星月夜

高木 智

含紅抄 その二 沼田 巴字
大悟いくつ小悟いくつや唐辛子
人は死に人に遣りし秋の風
後より撃たるる思ひ威し銃
つづくてふことよるしき曼珠沙華
白さるすべり逢ふということ只ならず

活断層 松平 菩提子

防災日ざくざく知れる活断層
秋高し「あをぞら」の空今朝のそら
山蛭となり降つて来る隣国ぞ
手触りの犬蟻イヌアリこれも新口シア
浜の真砂と只ごと俳句初月夜

秋晴れる 松本 鷹根

嵯峨奥へ露の深さのほとけ道
燦々と水の傾斜の嵯峨初秋
あきつ浮く風に望郷淡かりし
赤とんぼ仕種ゆたかな妻に蹴く
六甲に生駒 金剛秋晴れる

平城宮址 奥村 鷹尾

澄天の宮址を指呼に棲みて老ゆ
朱雀門北面に棲み臣下の礼
露纏ふ薄紅花芽煙めけり
奥の院のしるべ板朽ち苔清水
返り咲く薄紅花芽透く朝日

小堀 寛

大いなる魚うらがへす八月十五日
ノーベル賞紙と鉛筆俳の秋
系圖屋の系圖は白し桐の秋
織月のねむれるごとく稲架太る
たれかがつけし径らし十三夜



京鹿子集

豊田都峰選

流灯の追伸として笹小舟

京田

山中志津子

蓮ひらくこの世の空気読むために

いわし雲大琵琶を出る川の幅
立待ちや峽十枚の隠し田に

久世

佐久間多佳子

分校に音符あそびの赤とんぼ

灯を消してよりの長さや鉦叩

天領村なりし高嶺の小望月

星月夜白馬も翼欲しからむ

しんがりは叱られ役のスイツチヨ

解夏の扉の解かれて僧は西東

豪華客船くらげの重さ量りゐる

逃げ水や妻子の顔も見え隠れ

五ツ子

伊吹 之博

大あくびして生きてゐる原爆忌

シヨパン忌や医師は祖国へ空きロツカー

眼病み桃の甘さを確かめり

重陽や異国で去年の句集繰る

海鳴りも耳鳴りも去り九月来る

長き夜独り言までイングリツシユ

いと易き死あり布目の新豆腐

秋冷や夜の図書館で筆走る